

解説

出雲路 修

一 成立をめぐって

1

沙門は王者を敬すべきか否か、ということに關しての議論が『弘明集』卷十二に収録されている。

王謚は、沙門は王者を敬すべきではなく、王者こそ沙門を敬すべきである、と説く。外国では君主はみな沙門に礼をとる、それは沙門を道の体現者と認めてのことである、とする。

王謚のそのような考えを非難して桓玄は、

外国の君主は諭えるのにふさわしくはありません。仏教が興^{はじま}ったところでも、その旨は知ることができるのです。六夷は驕強で普通の教では教化できないので、だから大いに靈妙不思議な方便^{へんぽう}をもって、六夷を畏伏させたのではないのでしょうか。すでに畏伏させてからしかる後に、軌^{みち}に順わせたやりかたは、これはすなわち大いに鬼神の福報(因果応報)のことを懼れた結果のことであって、どうしてこれが玄妙な道を尊んだことになりましょうか。

外国之君、非所宜喻、而仏教之興、亦其旨可知、豈不以六夷驕強、非常教所化、故大設靈奇、使其畏服、既畏服之、然後順軌、此蓋是大懼鬼神福報之事、豈是宗玄妙之道耶、

〔弘明集研究〕 訳注篇、遺文篇〔京都大学人文科学研究所〕

とする。すなわち、外国の君主が沙門に礼をとるのは、「靈奇」でだまし「鬼神福報之事」でおどしたからなのだ、沙門が道の体現者であつたからではないのだ、と説く。

それに対して王謚は、

私が考えますのに、大いに靈妙不思議な方便を設けて、示すに因果応報の教をもつてするという、これこそ影響（が形や音に應ずるよう因果応報がある）という真実の道理であり、仏教の根本の要目なのです。

以為大設靈奇、示以報応、此最影響之実理、仏教之根要、

〔弘明集研究〕 訳注篇、遺文篇〔京都大学人文科学研究所〕

とする。すなわち、桓玄が仏教徒のだまし・おどしだとした「靈奇」「報応」こそ、仏教の「根要」なのだ、とする。外国の君主たちは、仏教の「根要」にふれたがゆえに沙門に礼をとるようになったのだ、とするのである。「靈奇」「報応」を、明確に「仏教之根要」として位置づけている。

その王謚はまた一方で、仏教が信じがたいものであるということについても言及している。理解しやすい儒教でさえも教えにしたがわない者がいる、とし、

まして仏教は、この人生は彈指の間の僅かな時間だとし、真の終局を求めることを永劫のあなたに期しております。また靈異もはつきりした姿を現わさないと語り、報応をまだ姿もない来世に設定しております。この仏教を受け入れて信ずるのは、なかなか難しいことではありませんか。

況んや佛一生涯於彈指、期要終于永劫、語靈異之無位、設報應於未來、取之能信、不亦難乎、

〔弘明集研究〕 訳注篇、遺文篇〔京都大学人文科学研究所〕

とする。仏教の信じがたさを、無位の靈異と未來の報應とに由来する、としている。

「仏教之根要」たる「靈奇」「鬼神福報之事」が、きわめてあいまいなかたちでしか顕現しないことが、仏教を信じがたくしているのだ、と説くのである。

2

景戒によって編まれた説話集は、彼自身によって「日本国現報善惡靈異記」と名づけられた。上巻の序には、

故に聊側に聞くことを注し、号けて日本国現報善惡靈異記と曰ふ。上中下の参卷と作て季の葉に流ふ。

とみえる。

跋には、

我れ聞く所に從ひて、口伝を選ひ、善と慊とを儼として、靈奇を録す。

とみえる。「儼善慊」は、その意味するところがいささか不明確なのだが、「慊」はおそらくは「惡」の増画字で、

「善慊」は「善惡」の意であろう。「儼」は「黨」に通じ、同類のものを集める意であろう。興福寺本の上巻第十七縁の訓釈には「多牟良止之天」とみえる。「儼善慊」は、善惡にかかわる説話を分類整理する意であろう。

書名の「現報善惡」と跋の「儼善慊」、書名の「靈異」と跋の「録靈奇」とは対応をみせている。

これより推せば、この書名は、「日本国の現報善惡と靈異との記」と解されるべきであろう。

さらに、右に述べた王謚の「靈奇」「靈異」と景戒の「靈異」「録靈奇」、王謚の「鬼神福報之事」「報応」と景戒の「現報善惡」「儼善慊」は、それぞれに対応をみせている。

「報応」と「靈異」と。この二つを中核にして、景戒の説話集『日本国現報善惡靈異記』は編纂された。このような仏教信仰こそが仏教の根要である、という立場に王謚は立ち、また、景戒も立っている、ということである。

「報応」と「靈異」とを重視することはひとり王謚に限られたことではなかった。塚本善隆の指摘によれば、中国で実社会に行われた仏教は、次のようなものであった。

過去、現在、未来の三世にわたる因果応報・輪廻転生の信仰。

神聖なる世界並びに仏・菩薩等の存在の信仰。

（唐中期の浄土教——特に法照禪師の研究——『塚本善隆著作集 第四巻』大東出版社）

王謚や景戒の重視した「報応」と「靈異」、これこそが中国で実社会に行われた仏教の中核をなしていたのである。

3

書名にみえる「現報善惡」とは、何か。

慧遠の『三報論』に、次のようにある。

仏教の經典に、「業には三種の報がある。第一は現報であり、第二は生報であり、第三は後報である」と説いているが、（第二の）現報とは、善惡の業が此の身に始まって、その報をすぐ此の身に受けるのをい、（第二の）生報とは、来生に生まれてその報を受けるもの、（第三の）後報とは、（すぐ次の世に報を受けないで）、あるいは二生、三生、百生、千生を経てはじめてその報を受けるものをいうのである。

経説、業有三報、一曰現報、二曰生報、三曰後報、現報者、善惡始於此身、即此身受、生報者、来生便受、後報者、或經二生三生百生千生、然後乃受、

（『慧遠研究』遺文篇（創文社））

あるいは唐臨の『冥報記』序には、

だが応報の説にも三種がある。一は現報である。この身に善惡の業をなし、自身の身に報を受けるものはいずれも現報と名づける。二は生報である。この身に業をなしながら、すぐには報を受けず、業の善惡に随がつて地獄、餓鬼などの諸道に生れ変わるものはいずれも生報と名づける。三は後報である。過去の身に善惡の業をなし、その果報は身に受けるはずでありながら、現在に業を為しても直ちに報を受けるにいたらず、つぎの後生に、あるいは五生十生ののちにはじめて報を受けるものはいずれも後報と名づける。

然其説報、亦有三種、一者現報、於此身中、作善惡業、有於此身而受報者、皆名現報、二者生報、謂此身作業、

不即受之、随業善惡、生於諸道、皆名生報、三者後報、謂過去身、作善惡業、能得果報、応多身受、是以現在作業、未便受報、或次後後生受、或五生十生、方始受之、是皆名後報、

（『校本冥報記 付訳文』東北大学文学部支那学研究室）

とみえる。

「現報」とは、「報」のひとつ。「時」を基準としてなされた「現報」「生報」「後報」という「報」の三分類、の一項である。

「現報」は、その人の行為に対する「報」がその人の生涯のうちに現れる。現在世で完結する因果応報のありかた。「生報」は、その人の行為に対する「報」がその人の生涯のうちに現れずに、次の生にさまざまなものに転生するというかたちでおこなわれる因果応報のありかた。

「後報」は、その人の行為に対する「報」がその人の生涯のうちに現れずに、転生を経た後の生涯に「報」が現れる。

「生報」「後報」は、因果応報が現在世で完結しない。

4

「霊異」とは、どのようなものか。

たとえば『芸文類聚』霊異部は卷七十八に「仙道」、卷七十九に「神」「夢」「魂魄」、と下位分類されている。『列仙伝』『神仙伝』からの引用を多く含み、「遊仙詩」「神女賦」の類を多く収録する。「霊異」の世界が神仙的な世界に

直接していたことが読みとれる。

『太平広記』『太平御覧』には、書名に「霊異」の語を含む書たとえば『霊異志』『霊異録』からの引用が存するが、すべてが「魂」や「死」にかかわる説話である。

『隋書』許善心伝に、

帝嘗言及高祖受命之符、因問鬼神之事、勅善心与崔祖璿、撰霊異記十卷、

とあり、許善心と崔祖璿とが煬帝の命を受けて「霊異記十卷」を撰したという。「鬼神之事」とあることが注目される。

いずれも超自然的な現象にかかわる。

『晋書』干宝伝には、

宝以此、遂撰集古今神祇霊異、人物変化、名為搜神記、凡二十卷、

とある。「志怪」である『搜神記』（干氏志怪）『西陽雜俎』卷四にかかわつての言なのだから「霊異」は「怪」なるものに相違ないのだが、「神祇霊異」とあるのが注意される。たんなる「怪」な現象ではなく、その背後に超越的なもの（ここでは「神祇」をもつた超自然的な現象、とみるべきであろう）。

5

『日本国現報善惡霊異記』には、「現報善惡」に関して次のような類型的な標題をもつ説話が含まれている。

I — 得現報縁

II — 而現得善惡報緣（「而」には「以」のばあいを含めて考える）

III — 而現〇得惡〇報緣（「而」には「以」のばあいを含めて考える）

Iは、たとえば

信敬三寶得現報緣（上巻第五縁）

IIは、たとえば

依漢神崇殺牛而祭又修放生善以現得善惡報緣（中巻第五縁）

IIIは、たとえば

自幼時用網捕魚而現得惡報緣（上巻第十一縁）

常鳥卵煮食以現得惡死報緣（中巻第十縁）

皆讀法花經僧而現口喎斜得惡死報緣（中巻第十八縁）

などである。

これらの標題は、三報の一項である「現報」を、その「報」の善惡によつてさらに三分類したものである。すなわち、「よい報」「よい報とわるい報と」「わるい報」である。ここに「よい報」の説話の標題が「而現〇得善〇報緣」ではなく「得現報緣」とされていることが注目される。標題においては「現報」の語の意味は「よい報」に限定されているのである。ここに、書名が「日本国現報善惡靈異記」ではなく「日本国現報善惡靈異記」とされる理由があろう。「現報善惡」とされることによつてはじめて、その「現報」が「善」のみならず「惡」にもかかわることが明示されるのである。

『大唐西域記』にみえる「靈異」の語は、仏像や仏跡におこる超自然的な現象をさしている。いずれも人々が眼で見ることできる具体的な現象である。

有翠堵波、極多靈瑞、（巻三）

有大天祠、甚多靈異、（巻四）

神光時燭、靈瑞間發、（巻八）

靈異間起、神光時燭、（巻六）

などの例では「靈異」の語は「靈瑞」の語と同義に用いられている。

靈アヤシメツラシ（『名義抄』）

瑞印也（国会図書館本『日本靈異記』中巻第二十一縁訓釈）

瑞シルス（『名義抄』）

などの訓を参照すれば、「靈異」は「靈瑞」すなわち「アヤシキシルシ」である。いうところの「アヤシキシルシ」とは、仏の力の具体的なあらわれとしての超自然的な現象である。

「靈異」に関しては『日本国現報善惡靈異記』には、次のような類型的な標題をもつ説話が含まれている。

IV — 示異表縁

— 示奇表縁

— 示靈表縁

など「示あやしき表縁」の表現をもつもの。

たとえば

聖徳皇太子示異表縁（上巻第四縁）

引知識為四恩作絵仏像有驗示奇表縁（上巻第三十五縁）

など。これらには

憶持法花経得現報示奇表縁（上巻第十八縁）

のようにIと重複した表現のばあいもある。

「現瑞」「現瑞相」「示現種種瑞相」〔妙法蓮華経玄賛〕卷二末などといった「しるしをあらはす」表現の影響のもとに成立した標題であろうが、この標題こそ、「靈異」という景戒の理解語彙に対応する使用語彙ではなかっただろうか。

6

I 得現報縁

II 而現得善惡報縁（「而」には「以」のばあいを含めて考える）

III 而現得惡報縁（「而」には「以」のばあいを含めて考える）

IV 示あやしき表縁

という四種の標題は、『日本国現報善惡靈異記』の書名に含まれた「現報善惡」「靈異」に対応している。

この四種の標題をもつ説話について考えてみよう。

この四種の標題をもつ説話は、次の各縁である。

上巻

4・5・6・7・10・11・12・14・15・16・17・18・19・20・21・22・24・29・32・33・35

中巻

5・8・10・13・14・16・17・18・19・20・21・22・23・26・28・30・34・39・40

下巻

3・9・14・15・17・18・22・23・26・27・28・29・30・33

（下巻第十六縁は「得現報縁」とあるが、「現報」の語が「よい報」を意味しないので除外する）

この四種の標題をもつ説話を、現存する『日本国現報善惡靈異記』からその配列順を変更することなく抽出するならば、その説話群はきわめて独立性の高い、ひとつの説話集としての性格をみせる。

たとえば、隣り合った説話に内的連関による連鎖がみとめられる。たがいに隣り合った説話のそれぞれの目だたない一部分を共通項として「しりとり」がおこなわれている。いま、見やすいものを示すならば次のようになっている。

〔上巻〕

【4】聖徳皇太子

聖徳皇太子は使の言に発言しない

↓

【5】聖徳皇太子

敏達天皇は屋栖古の言に発言しない

【5】行基は文殊菩薩の化身

↓

【6】老翁は観音菩薩の化身

馬が涙を流す

すばらしい食物を食べる

- 【16】海で牡蠣を釣る
冥界にて金宮を見る
- 【17】礫と塊とをなげる
- 【18】法花経を誦持する僧
たちまちに死ぬ
- 【19】般若心経を誦持する女
誦経する音
- 【20】大和国添上郡山村里
母が娘のもとに使を遣る
- 【21】東大寺絹索堂の北戸に執金剛神像
- 【22】盗人捕らえられて圜圀に
仏の銅像が「痛きかな」と叫ぶ
- 【23】弥勒菩薩の銅像
「痛きかな」という叫び声
- 【26】椅の下に声
- 【28】女人
前世の業因で今世に貧窮
- 【30】女人
子が泣いて母を責める
- 【34】仏殿に観音像を安置
- 【17】水中より観音像を得る
金の指を見て仏を知る
- 【18】碁をうつ
- 【19】般若心経を誦持する女
たちまちに死ぬ
- 【20】母が娘のために誦経させる
読経する音
- 【21】諾楽京東山
天皇が山寺に使を遣る
- 【22】寺の北路での仏像の奇瑞
- 【23】盗人捕らえられて圜圀に
菩薩の銅像が「痛きかな」と叫ぶ
- 【26】弥勒菩薩等の像を雕造
「痛く踰むことなかれ」という声
- 【28】椅の所に銭
- 【30】女人
前世での負債を償う
- 【34】孤の嬢
泣いて観音に願う
- 【39】鵜田堂に薬師仏像を安置

〔下巻〕

- 【39】僧が仏像を発見
耳の欠けた仏像
- 【3】観音菩薩の手に縄を繫ける
- 【9】屈曲して死んだ死体に従者は恐怖
- 【14】浮浪人を打って追い使う
- 【15】自度の僧
- 【17】道場
- 【18】法花経を写す
- 【22】信農国小県郡
冥界の坂
冥界の三岐路
- 【23】蘇生
- 【26】讃岐国美貴郡の大領
貸した物の利息を取り立てる
- 【27】夜に呻き声がする
- 【28】紀伊国
弥勒菩薩像の頸が断れ落ちる
- 【29】紀伊国
木を彫刻して仏像を造る
- 【40】僧の姿を弓の的とする
黒眼を射られた僧の像
- 【9】地藏菩薩の手で撫でられる
- 【14】破碎された死体に諸人恐怖
- 【15】沙弥を打って追う
- 【17】自度の沙弥
- 【18】道場
- 【22】法花経を写す
- 【23】信農国小県郡
冥界の坂
冥界の三岐路
- 【26】蘇生
- 【27】馬を讃岐国人に売る
借りた物の返済をせまられる
- 【28】夜に呻き声がする
- 【29】紀伊国
仏像を斧で破る
- 【30】紀伊国
木を彫刻して十一面観音像を造る

【30】紀伊国

袈裟を着替える

死ぬ

【33】紀伊国

袈裟を剥ぐ

死ぬ

これらは必ずしも隣接した説話が抽出されたわけではないのだが、順次に説話の連鎖がみとめられる。この説話群はそれだけでひとつの世界をかたちづくっている。独立性は顕著である。このような説話の連鎖のありかたは、この説話群がまずひとまとまりの説話集として成立した、と考えるべきであることを示すものであろう。

7

下巻の序に

……仏の涅槃したまひしより以来、延暦六年歳の丁卯に次るとしに迄るまでに、一千七百二十二年を遡たり。

……日本に仏の法の伝り適めてより以還、延暦六年に迄るまでに、二百三十六歳を遡るなり。

などとみえるのは、延暦六年(747)を起点とした年時計計算である。

説話集の編纂が延暦六年におこなわれたことを推測させる記述である。しかし、現存の『日本国現報善悪霊異記』には延暦六年以後の時を示す記述も多くふくまれている。『日本国現報善悪霊異記』は、延暦六年にいったん編纂がおこなわれ、後年さらに改編増補されたということであろう。

上述した説話群にみえるもつとも新しい時の記述が「延暦四年乙丑夏五月」であることを合わせ考えるならば、こ

の説話群こそが延暦六年に編纂された説話集であることは、容易に推測することができよう。

延暦六年原撰本『日本国現報善悪霊異記』である。これこそが、「日本国の現報善悪と霊異との記」という書名にふさわしい内容の説話集といえよう。おそらくは、下巻第三十八縁にみえる「延暦六年丁卯秋九月朔四日甲寅日酉時」に見た夢に触発されての説話集編纂であろう。

延暦六年原撰本『日本国現報善悪霊異記』は、「現報善悪」と「霊異」という視点から書かれた、説話集という方法による日本仏教史である。因果の理の普遍性を確認しつつ(現報善悪)、仏の常住を確認しつつ(霊異)、日本仏教史が叙述されている。

聖徳太子を聖とし乞匄人を隠身の聖とする説話(現存本の上巻第四縁を冒頭に置き、聖武天皇を聖とし行基を隠身の聖とする説話(現存本の上巻第五縁)を第二話としている。末尾には「身を隠したる聖人、凡の中に交るが故に」と述べる説話(現存本の下巻第三十三縁)を置き、その直前には「内に聖の心を密し、外に凡の形を現す」と述べる説話(現存本の下巻第三十縁)を置いている。また、卑賤な者・醜惡な者が仏教の助けによって意外な力を発揮するという説話を多数収録する。

聖と隠身の聖とによって日本の仏教は伝えられてきた、とする考えがその背後にはみとめられる。教義史・教団史ではなく、民衆に仏教が受容された歴史が叙述されているのである。

8

現存の『日本国現報善悪霊異記』は、「現報善悪」と「霊異」という視点からの叙述は多くの増補説話に埋没して、

かえって不鮮明になっている。収録された説話は多様である。

あるいは仏教にかかわり、あるいは仏教にかかわらない。さまざまな「あやし」の世界『名義抄』には「異」「怪」「神」「奇」「霊」「偉」などに「アヤシ」の訓が展開される。宗教を逸脱したところに文学を考える性癖の現代人の感覚からは、むしろ現存の『日本国現報善悪霊異記』こそが興味あるものとされよう。

延暦六年原撰本の説話からさらに連鎖の枝をのばすようにして、原撰本の説話と現存本の説話とのあいだに説話の連鎖がみられ、その説話からさらに連鎖の枝がのびている。

この現存本の『日本国現報善悪霊異記』の成立年時は不明である。

下巻第三十九縁に嵯峨天皇(八〇六三在位)が登場し、「弘仁(八〇六四)の年号がみえる。「此の天皇の時に、天下にひでり^{あめふり}の属^{あま}有り。また天の災^{わざはひ}と地の妖^{あま}と飢饉^{うみ}の難^{わざはひ}と繁^{あまた}く多有り。また鷹と犬とを養ひて鳥と猪と鹿とを取る。是れ慈悲^{うつくし}ぶる心にあらず」とあるのは嵯峨天皇の治世が何年か続いているの言である。八二〇年前後の言であろうか。

下巻第三十九縁に「今平安宮疏十四介^し治天下賀美能天皇是也(真福寺本とある箇所を「今平安宮疏十四年治天下賀美能天皇是也(今、平安の宮にほゞ——若は、あらら——十四年天の下治す賀美能天皇是なり)」として、嵯峨天皇の治世の第十四年に説話集の編纂がなされた、とする板橋倫行「日本霊異記の選述年時について」(『国語と国文学』第七巻第三号)に代表される通説は、本文解釈の上で問題がある。

「十四介^し」を訓釈の竄入として本文より除外し、「疏」を「統」の誤写として、本文を「今平安宮統治天下賀美能天皇是也」と整訂すべきではないだろうか。

「介^し」は「統」に対する訓釈「スヘ」の誤写であろう。「十四」もなにかの誤写であろうが、成案をもたない。

この箇所は嵯峨天皇の治世の十四年を意味する記述が含まれている、という通説には多くの問題があらう。弘仁年間の成立、とする以上の限定は無理であらう。

9

延暦六年(七六七)に、「現報善悪」と「霊異」という視点から書かれた、説話集という方法による日本仏教史『日本国現報善悪霊異記』が、編纂された。

その後、数度の過程を経たのであらうが、弘仁年間(八〇六四)に、現在みるようなかたちの説話集、さまざまな「あやし」の世界を描いた『日本国現報善悪霊異記』、へと改編された、ということであらう。延暦六年原撰本と現存本との間に存する、時間的な、内容的な、大きな隔たりは、我々の想像をかきたてはするが、結局のところ「謎」というほかはない。

二 編纂者

本書を編纂した景戒に関しては、本書の記述以外には知られていない。真成『大僧正舎利瓶記』にみえる行基(薬師寺沙門)とされる(の弟子景静、『類聚国史』仏道部・還俗僧の条にみえる薬師寺景国は、おそらく無関係ではないであらうが、詳細は不明である。

三 文 章

四字句を基調とした漢文で書かれている。四字句は、たんに視覚的效果をねらったものではないであろう。贅には押韻をこころみた形跡がある。おそらくは、音読されて受容されることを念頭に置いた文章表現であろう。訓読されて受容されることを念頭に置いて書かれた、たとえば『古事記』のようなものではない。

訓読は受容のありかたのひとつ。本書が訓読されて受容されたこともあったことは、たとえば諸写本の訓釈に遺存している訓読、たとえば『三宝絵』に反映している『日本霊異記』の訓読、によって知ることができる。

諸写本の訓釈に遺存している訓読と『三宝絵』に反映している『日本霊異記』の訓読とが同じかたちのものであった、と仮定するならば、たとえば回想の助動詞「き」の用い方について次のような判断がくだせよう。

『日本霊異記』の訓読において、

- ① 説話の冒頭部の文末と末尾部の文末とには「き」を用いてその中間には「き」を用いない、という説話文体は採用されなかった。
- ② 連体形「し」は、会話文、地の文、いずれのばあいにも用いられた。
- ③ 終止形「き」は、仏典の引用文中に用いられた。
- ④ 終止形「き」は、会話文中に用いられ、地の文の中に用いられることはまれであった。

四 諸本について

本書の古写本はいずれも零本または省略本である。

興福寺本

延喜四年(九四)写本の模本。上巻のみを残す零本。序と説話三十五縁収録。

来迎院本

平安後期の書写。中・下巻それぞれの一部分のみを残す零本。他本には欠脱している中巻序・下巻序の大部分を残す。

真福寺本

鎌倉時代の書写。中・下巻のみを残す零本。中巻は、序の前半を破損、説話四十二縁収録。下巻は、序の前半を破損、説話三十九縁収録。

前田家本

嘉禎二年(三三六)の書写。下巻のみを残す零本。下巻序の全文を残し、説話三十九縁および断片二条収録。

国会図書館本

三昧院本(建保二年「三四」の奥書。現在は所在不明)の模本。上巻は、序と説話三十一縁収録。中巻は、序を欠き(序の一部分は上巻末に竄入)、説話実数は二十八縁。下巻は、序を欠き、説話実数は二十縁。標題のみを残して説話

本文を省略したり、あるいは欠脱している場合が多い。真福寺本下巻第二十六縁にあたる説話のごく一部分を残して、以下の下巻の本文を欠いている。

「誤写」ということではなく後人の「偽作」が疑われた本文が、前田家本に存する下巻の序であった。来迎院本の発見により、下巻の序の「偽作」説は鳴りをひそめたが、錯綜した本文の理解の問題もあって、十分に解明されたわけではない。「偽作」された本文が写本に存するか否か、は本文校訂の上ではきわめて重大な問題である。

以下には、下巻の序の本文の錯綜した部分を取りあげ、原本から前田家本への変化がわずかな過程を経ることによっておこり得ることを示し、前田家本の下巻の序の本文が原本に近いことをみてみよう。

下巻の序の一部分は、本来は①のような字詰の本文と、その一部分である「嗜名利殺生疑善根惡種」に対する注釈「以比無目之人履寶尾叵失之兮託鬼之人抱毒蛇莫朽之兮」とによって成っていた。

①

…夫花咲無声鶏鳴無涙觀代修善之者若
石峯花作惡之者似土山毛匪繕因果作罪
嗜名利殺生疑善根惡種惡報過來如水鏡
向之即現幸力颯被如谷響喚之必応……

注釈が②のような形式で行間に記されたことに起因して、前田家本のような本文の祖形が成立した。

②

…夫花咲無声鶏鳴無涙觀代修善之者若
石峯花作惡之者似土山毛匪繕因果作罪
〔以比無目之人履 寶尾
叵失之兮〕

嗜名利殺生疑善根惡種惡報過來如水鏡

〔託鬼之人抱毒蛇莫朽之兮〕

向之即現幸力颯被如谷響喚之必応……

前田家本の本文

……夫花咲無声鶏鳴無涙觀代修善之者若石峯花作惡之者似土山毛匪繕因果作罪以比無目之人履叵失之兮虎見尾嗜名利殺生疑善根惡報過來如鏡託鬼之人抱毒蛇莫朽之向之即現幸力颯兮惡種叵被如谷響喚之必応……

以上の推測は、本文校訂の補説であるとともに、下巻の序に関しては来迎院本よりも前田家本の方が原形をとどめている、ということの指摘である。来迎院本の本文の原本からの遠さをうかがわせる。また、前田家本の下巻の序に「偽作」を含むという積極的な証拠は存しない。

* 本解説は、拙著『説話集の世界』(岩波書店、一九八八年)に多く拠っている。

主要参考文献

〔古写本の複製〕

- 興福寺本 『日本国現報善惡靈異記上巻』 京都便利堂 一九三四年
来迎院本 日本古典文学影印叢刊1『日本靈異記 古事談抄』 財団法人日本古典文学会内貴重本刊行会 一九七八年
前田家本 尊経閣叢刊19『日本国靈異記巻下』 育徳財団 一九三一年
国会図書館本 古典資料6『日本靈異記』 すみや書房 一九六九年

〔校本〕

- 遠藤嘉基・春日和男校注『日本靈異記』(日本古典文学大系) 岩波書店 一九六七年

〔索引〕

- 春日和男・原栄一共編『日本靈異記漢字索引』(『説話の語文』別冊) 桜楓社 一九七五年

〔校訂本文〕

- 狩谷掖斎『校本日本靈異記』(日本古典全集『狩谷掖斎全集 第二』) 日本古典全集刊行会 一九二五年
武田祐吉校注『日本靈異記』(日本古典全集) 朝日新聞社 一九五〇年
中田祝夫校注・訳『日本靈異記』(日本古典文学全集) 小学館 一九七五年

〔注釈〕

- 狩谷掖斎『日本靈異記攷証』(日本古典全集『狩谷掖斎全集 第二』) 日本古典全集刊行会 一九二六年

- 松浦貞俊『日本国現報善惡靈異記註釈』 大東文化大学東洋研究所 一九七三年

- 武田祐吉校注『日本靈異記』(日本古典全集) 朝日新聞社 一九五〇年

- 板橋倫行校注『日本靈異記』 角川文庫 一九五七年

- 遠藤嘉基・春日和男校注『日本靈異記』(日本古典文学大系) 岩波書店 一九六七年

- 中田祝夫校注・訳『日本靈異記』(日本古典文学全集) 小学館 一九七五年

- 小泉道校注『日本靈異記』(新潮日本古典集成) 新潮社 一九八四年